

現象

著者	末松, 紀一
雑誌名	龍南
巻	2 0 9
ページ	2 0 - 2 1
発行年	1929-02-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/9171

現象

末松紀一

太陽は快活な青年だよ

月は俏けてゐる女性だよ

星は驚いてゐる子供達だよ

それはみんな嘘だよ

太陽は人間を憎んでゐるんだよ

月は人間を冷笑してゐるんだよ

星は人間を嘲つてゐるんだよ

それはみんな嘘だよ

風がやめば落葉の躍りはやむまさはふらふらなくなる

人間のつまらない脳髓なんかなくつてもいいのだ

あゝいゝのだとも

眞白だ 眞白だ 眞白だ

あゝあゝ俺は自然現象の穴をする

おそれ

どこからともなく風が吹いた

木の葉がゆれた

そしてその一枚が落ちた

運命の眼が疑視してゐた

眞暗な夜半に目が覺めた

私は運命の足音を聞いた

も少しして 来てくれ……

私はまた目をつむつた

私は走つた

私は走つた　せうばい

私は後ろをふりかへつた

運命が追ひつかうとしてゐるのを見た

鐵門の前に跌座して

後ろに嘲笑ふものの聲がある

前は鐵扉

時が　本當に肅々と進行してゐるのを聞きとる

私は本を閉ぢて何を考へたものだらう

死即生　生即死

生即生　死即死

何たる平凡な命題か

だが私は上に輝く星を見つけた

私はそつと黒い扉に觸れてみた

冷たさだ　嚴イカシしさだ

私は輝く星を見あげた

私はほとほと訪れてみた

次にどつかと坐つた

私は待つてあよう

もうやがて　もうやがて

鐵扉が開かれる！

だから私は星を見つめてゐよう

時が／＼流れる　流れる　流れる

何時までか

何時までもか

知らない　知らない　知らない

だが私は星が眞闇の中で輝くのをこの眼で見た